

急進的なウェストミンスターを見直す

中 村 武 司

はじめに

「1807年4月の「短期」議会の解散に引き続き、総選挙が実施された。その最も衝撃的な特色ないし特徴とは、世論の進展が、党派や派閥の影響力に大いに取って代わったかのようにおもわれたことである」。『アニュアル・レジスタ』誌の編者は、1807年の庶民院総選挙、とりわけウェストミンスター選挙の結果について、このような見解をしめした。同誌によれば、国政を壟断し、過去のウェストミンスター選挙をも左右してきた党派や派閥への人びとの反発や不信感こそが、急進派の勝利をもたらしたのである。「サー・フランシス・バーデットとコクリン卿は、あらゆる党派、派閥とのつながりを否定し、腐敗、ただ腐敗だけを撤廃するという彼らの意志を宣言することによって人びとの支持を獲得したのである。ウェストミンスターにおける彼らの選挙とは、貴族たちの連合への、またありとあらゆる党派と派閥への完全なる勝利であった」¹。イギリスの政治的首都にして最大の都市選挙区は、「ジャコバン」の手に落ちたのである。いわゆる「急進的なウェストミンスター (radical Westminster)」のはじまりである。

急進的なウェストミンスターの成立と展開にかんしては、古くはE. P. トムスンが、『イングランド労働者階級の形成』のなかで、1806年と1807年の選挙がもつ重要性を論じたほか、少なからぬ歴史家たちが考察を進めてきた²。近年ではマーク・ベアアが、18世紀末から19世紀末にかけてのウェストミンスターの政治文化をめぐるモノグラフを著し、民主的な政治文化の形成における1807年の歴史的意義をあらためて強調している³。多くの場合、急進派の活動をささえたアソシエーションの

1 *Annual Register* (1807), pp. 235-6

2 E.g., E. P. Thompson, *The making of the English working class* (London: V. Gollancz, 1963), chapter 13 [市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』(青土社、2003年)] ; J. M. Main, 'Radical Westminster, 1807-1820', *Historical Studies: Australia and New Zealand*, xii (1966), pp. 186-204; W. E. S. Thomas, *The philosophic radicals: nine studies in theory and practice, 1817-41* (Oxford: Clarendon Press, 1979), chapter 2; Peter Spence, *The birth of romantic radicalism: war, popular politics and English radical reformism, 1800-1815* (Aldershot: Scolar Press, 1996), chapter 3. 以上にたいして、1790年代後半からの連続性を重視する研究もある。その場合、フォックス派ホイッグと急進派との提携や、ミドルセクス選挙区からのサー・フランシス・バーデットの当選がむしろ注目される。J. Ann Hone, *For the cause of truth: radicalism in London, 1796-1821* (Oxford: Clarendon Press, 1982).

3 Marc Baer, *The rise and fall of radical Westminster, 1780-1890* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2012). また、idem, 'From 'first constituency of the empire' to 'citadel of reaction': Westminster, 1800-90', in Matthew Cragoe and Anthony Taylor (eds), *London politics, 1760-1914* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2005), pp. 144-65もみよ。

存在——ウェストミンスター委員会 (the Westminster Committee) ——に注目しているのも、先行研究の共通点としてあげられる。

もともと、このような研究の主張とは、1807年のウェストミンスター選挙の結果を、現在の民主政治にいたる歴史のなかのひとつの到達点とみなしたうえで⁴、19世紀初頭のイギリスのラディカリズム（急進主義）を評価するという目的論的・進歩史観的な前提から導かれているのではないだろうか。同時に、ウェストミンスターとその有権者の特徴として、野党的で改革支持の傾向が強いとする、暗黙の想定があったとも考えられる。歴史家たちに求められているのは、むしろそのような前提や想定を可能なかぎり排して、急進的なウェストミンスターがもつ歴史的な意義や射程を当時の政治的・文化的脈絡にそくして考え直すことであろう。本稿は、そのためのささやかな試みのひとつである。

それにあたり、本稿は、重要であるにもかかわらず、歴史家たちがこれまで等閑視してきたウェストミンスター選挙区のある特徴に着目する。その特徴とは、18世紀末から19世紀初頭にかけて、ロドニ提督やフッド提督をはじめとする著名な海軍の英雄が、ウェストミンスターから継続的に議員に選出されていたというものである⁵。1807年以降も、海軍士官が議席のひとつを占めるという状況に変化はなかった。しかし、その前後で大きな違いも認められる。1806年までであれば、海軍士官候補はみな政府に擁立されて出馬した体制支持派（loyalist）であった。それは体制側、とりわけピット政権が海軍の「国民的神話」、あるいは海軍のパトリオティズム（愛国心・愛国主義）を横領しようとした顕著な例とみなすことができる⁶。ところが、1807年に当選したトマス・コクリン

4 P. J. コーフィールドは、18世紀から19世紀前半の首都ロンドンでみられた選挙に参加する広範な政治文化への理解を深めるために、プロト・デモクラシーの概念を創案した。しかし彼女は、それがのちの普通選挙や民主政治につながるものではないとも注意を促している。P. J. コーフィールド（小西恵美・山本千映訳）「プロト・デモクラシー——ロンドンの選挙人と市民的政体、1700-1850年」『英国と近代？——3つのエッセイ』（科研リサーチ・ペーパー、2009年）、5-19頁。ほぼ同内容の論考は、以下のウェブサイトから確認することができる。London Electoral History, 1700-1850 <URL=<http://www.londonelectoralhistory.com>>.

5 これについて詳細は、以下の拙稿を参照されたい。中村武司「ウェストミンスター選挙区における体制支持派の提督とイギリス海軍の「神話」、1780-1806年」『西洋史学』254号（2014年）、19-37頁。

6 1980年代後半以降、長い18世紀イギリスのパトリオティズムや自由、あるいは帝国をめぐる想像力を検討するにあたり、海軍の英雄とそれにたいする人びとの反応や認識が議論の俎上に載せられてきた。たとえば、以下を参照。Kathleen Wilson, 'Empire, trade and popular politics in mid-Hanoverian Britain: the case of Admiral Vernon', *Past and Present*, cxxi (1988), pp. 74-109; Gerald Jordan and Nicholas Rogers, 'Admirals as heroes: patriotism and liberty in Hanoverian England', *Journal of British Studies*, xxviii (1989), pp. 201-24; Steven Conway, 'A joy unknown for years past': the American war, Britishness and the celebration of Rodney's victory at the Saints', *History*, lxxxvi (2001), pp. 180-99; Margarette Lincoln, *Representing the Royal Navy: British sea power, 1750-1815* (Aldershot: Ashgate, 2002), esp. chapter 3; Timothy Jenks, *Naval engagements: patriotism, cultural politics, and the Royal Navy, 1793-1815* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2006); James Davey, 'The naval hero and British national identity, 1707-1750', in Duncan Redford (ed.), *Maritime history and identity: the sea and culture in the modern World* (London: I. B. Taulis, 2014), pp. 13-37. イギリスの海軍史研究の泰斗であるN. A. M. ロジャーは、当時のイギリスには、海軍力をめぐる「国民的神話」が成

卿 (Thomas, Lord Cochrane, later 10th earl of Dundonald, 1775-1860) は⁷、「旧き腐敗」を攻撃し、議会や海軍の改革を声高に主張する急進派であり、体制支持派とは対極に位置していたことになる⁸。本稿が検討するのは、この海軍出身の議員の事例にみられる連続と変化の問題である。そのさい、従来の研究と同様に、1806年と1807年の2つの選挙を対象とするのが妥当であろう。

本稿では、2つの章にわけて、上記の問題について考察を進めることとなる。第1章では、議会改革運動が復活する契機となった1806年のホニトンとウェストミンスタの選挙を検討する。第2章では、1807年の選挙におけるコクリンの出馬と当選の事例を考えることとしよう。いずれの章においても、海軍の英雄の表象や「神話」にかかわる問題がとりあげられることだろう。また、有権者の投票行動もあわせて分析して、急進的なウェストミンスタをめぐるわたしたちの理解を深める一助としたい。

1. 1806年——議会改革運動の再興

1.1. ホニトンの補欠選挙と総選挙

ホニトンは、イングランド南西部デヴォンシアにある都市選挙区である。1801年の人口は2,377名、戸主に選挙権が認められており、19世紀初頭の有権者数は約450名であった⁹。ヤング家もしくはコートニ家の近親者がここから選出されることが多かったとはいえ、特定のパトロンが選挙区を支配していたわけではなかった。当時ホニトンは、最も腐敗した選挙区のひとつとして悪名高かったのである。歴史家フランク・オゴアマンによると、ホニトンは、候補者が提供する金銭が選挙結果を左右した「金権型」都市選挙区 (venal borough) とされる¹⁰。1万人以上の有権者を抱え、世論が選挙結果に影響する「開放型」都市選挙区 (open borough) であるウェストミンスタとはじつに対照的な選挙区だといえよう。しかし、1806年にここで実施された選挙とは、のちの議会改革運動の展開

立していたと論じている。N. A. M. Rodger, 'Queen Elizabeth and the myth of sea-power in English history', *Transactions of the Royal Historical Society*, 6th ser., xiv (2004), pp. 153-74.

7 コクリンの最新の伝記として、David Cordingly, *Cochrane the dauntless: the life and adventures of Thomas Cochrane* (London: Bloomsbury, 2007)がある。また、2011年にスコットランド国立博物館で展覧会「コクリン提督——真のマスター・アンド・コマンドー (Admiral Cochrane: The Real Master and Commander)」が開催されたのを機に、次の論考も刊行された。Stuart Allan, 'The hero with a thousand faces': the literary legacy of Lord Cochrane', *Journal for Maritime Research*, xv (2013), pp. 167-82.

8 「旧き腐敗」については、以下を参照。Philip Harling, *The waning of 'old corruption': the politics of economical reform in Britain, 1779-1846* (Oxford: Clarendon Press, 1996)。金澤周作「旧き腐敗の諷刺と暴露——19世紀初頭における英国国制の想像／創造」、近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』(山川出版社、2008年)、444-79頁。

9 とくに断らないかぎりには、ホニトン選挙区の概要や選挙結果は、History of Parliament Online <URL=http://www.historyofparliamentonline.org>に依拠したものである。

10 Frank O'Gorman, *Voters, patrons and parties: the unreformed electoral system of Hanoverian England, 1734-1832* (Oxford: Clarendon Press, 1989), pp. 28-31.

を考えるうえで無視できない出来事なのである。

1806年6月、現職のホニトン選出の議員であるオーガスタス・カヴェンディッシュ＝ブラッドショウが、アイルランド財務府出納係（Teller of Exchequer of Ireland）に就任したため議員を辞職し、有権者の信任を問うべく補欠選挙がおこなわれることとなった¹¹。ただしこの官職とは、全人材内閣（Ministry of All the Talents）からブラッドショウに与えられた閑職であり、急進派からすれば腐敗の明白なあかしだった。なかでもウィリアム・コベットは、彼が編集する『ポリティカル・レジスタ』誌に「ホニトンの有権者への書簡」を二度にわたり掲載し、腐敗していない「独立」の精神に則った選挙のために買収と贈賄の禁止を主張しただけでなく、候補者にも当選後、官職や公金の受領を拒絶するよう呼びかけたのである¹²。さらにコベットは、対立候補が現れない場合、彼自身が補欠選挙に出馬することさえ考えていたのだった¹³。

同年5月、パラス号の航海からプリマスに帰還したコクリンは、コベットの『レジスタ』誌の記事を目にして、ホニトン補欠選挙への立候補を決意した。その決意は、彼の叔父であるアンドルー・コクリン＝ジョンストンを経て、コベットに伝えられたのである¹⁴。当初よりコクリンが、急進的な議会改革運動にかかわる意志をもっていたのかは判然としない。たしかなのは、コベットが、その生涯をつうじて、コクリンを支持し続けたことである。後年、コベットが著したスコットランド旅行記の記述にも、それをうかがうことができる。

コクリン卿は、彼の父親の所領のあったここークロス（Culross）で誕生した。彼が受けた境遇を思い返すとき、名状しがたい憤りでわたしの心は一杯になる。……いまわたしは、コクリン卿になされたあらゆる卑劣な行為は、人びとの目には軽蔑すべきものであったことを想起している。コクリン卿は、わたしが知る誰よりも熱意と誠実さをもって、議会で人びとのために尽力したのである。……武器をとっても、コクリン卿は、わたしが知る誰よりも有能で、また

-
- 11 長い18世紀イギリスにおける官職就任による議員辞職と補欠選挙については、青木康「選挙区・議会・政府」、近藤和彦編『長い18世紀のイギリス——その政治社会』（山川出版社、2002年）、86-114頁。なお、1806年のホニトン選挙については、John Sugden, 'The Honiton elections of 1806 and the genesis of parliamentary reform', *The Devon Historian*, xxxi (1985), pp. 3-10もみよ。
- 12 コベットにかんしては数多くの伝記・研究が出ているが、近年の研究成果として、以下の論集がある。James Grande and John Stevenson (eds), *William Cobbett, romanticism and the enlightenment* (London: Pickering & Chatto Publishers, 2015)。
- 13 *Cobbett's Weekly Political Register* (以下、CWPRと略記する), ix, 24 May 1806, cols. 769-97; 7 June 1806, cols. 833-5. また、Lewis Melville, *The life and letters of William Cobbett in England and America*, 2 vols (London: John Lane, 1913), i, pp. 322-7もみよ。
- 14 William Reitzel (ed.), *The autobiography of William Cobbett: the progress of a plough-boy to a seat in parliament* (London: Faber & Faber, 1967), pp. 95-6. コクリン卿とは、スコットランド貴族であるダンドナルド伯の長子が名乗る儀礼称号（courtesy title）であるため、グレートブリテンの議会では庶民院議員となりうる。

誰よりも無私の態度でその祖国のために貢献しようとしたのだ¹⁵。

選挙が始まると、コクリンは、コベットとコクリン＝ジョンストン両名の支持のもと、「愛国的な原則」にもとづいて行動するという決意を表明した。この原則とは、選挙における買収行為の拒絶にくわえて、候補者が、閑職や不当な地位、公金を受領しないというものだった。つまり、コベットの主張にしたがって彼は行動しようとしたのである。またコクリンは、演説でこう述べてもいる。「わたしの絶え間ない努力が、一般にはわが祖国にとって、とくにこの都市にとって有益だといえるでしょう。そのうえ、わたし自身の観察からその存在を知る歴大な腐敗を指摘できることを心より望んでいるのです」¹⁶。コベットは、結果を知ることなく選挙途中でロンドンに戻ったが、『ポリティカル・レジスタ』誌のなかでコクリンにかかる期待感をこのように記した。「なぜなら彼は、自己否定の精神に立っている。……寄生的な閑職保有者を取り除き、公平無私の態度を将来の候補者にしめすべくコクリン卿がしていることのすべてが、彼自身の精神から導かれ、彼自身の熱意と公共心により実行されるものなのだ」¹⁷。

補欠選挙では、少なくない有権者がコクリンに投票したものの、結局彼は、259対124という投票結果で現職のブラッドショウに破れた。だが、1806年10月に実施された総選挙では、コクリンはブラッドショウとならんでホニトンから無風で選出されたのである。

こうした選挙の結果とは、はたして彼やコベットのいう「愛国的な原則」をホニトンの有権者が支持したことを意味するものなのだろうか。コクリンは、本当にこの原則にしたがって行動したのだろうか。コクリンの自伝では、あくまで6月の補欠選挙後、彼に投票してくれた有権者にお礼として10ポンドを提供したと記されている¹⁸。別言するとコクリンは、総選挙では有権者を買収していないと主張したいわけである。しかし彼の自伝には、自己正当化のために歪曲された叙述が数多くみられるため、この記述を鵜呑みにはできない。それどころかコクリンは、1817年の議会の審議において、初当選したときに買収行為をおこなったことをはっきりと認めたのである¹⁹。後述するが、翌1807年のウェストミンスター選挙では、ホニトン選挙での行為から、コクリンは反対者から非難されることとなる。

一方でコクリンは、議員に選出されたとはいえ、インペリウス号による航海のため、再開された議会に出席することはほとんどなかった。他方でコベットは、ホニトン選挙により腐敗した現状を

15 William Cobbett, *Cobbett's tour in Scotland; and in the four northern counties of England: in the autumn of the year, 1832* (London, 1833), p. 136.

16 *CWPR*, ix, 14 June 1806, col. 879.

17 *CWPR*, ix, 28 June 1806, col. 969.

18 Thomas Cochrane, 10th Earl of Dundonald [Lord Cochrane], *The autobiography of a seaman*, 2 vols (London, 1860-1, reprinted in 1995-6), i, pp. 180-1. このコクリンの自伝は、彼とその個人秘書であったウィリアム・ジャクソンの提供した情報をもとに、ジョージ・バトラ・アープが執筆したものである。コクリンを研究するうえで、最重要史料のひとつといえるが、上述した理由から、扱いは注意が必要である。

19 *Parliamentary debates*, 1st series, xxxv, col. 92: Commons, 29 January 1817; col. 221: 5 February 1817.

再認識し、その関心をウェストミンスターに向けようとしていた。ホニトン選挙の記事のなかでも、彼はこう記している。「もし、ウェストミンスター市のどの候補者も、次回の選挙で公金受領に反論しないのであれば、そう宣言ができる人物を選ぶ機会を、わたしは有権者に提供しなければならない」[傍点は筆者によるもの。原文ではイタリック]²⁰。そこで次に、同年のウェストミンスター選挙に話題を変えることとしよう。

1.2. ウェストミンスタの補欠選挙と総選挙

1806年9月13日、全人材内閣の外務大臣にしてウェストミンスター選出の議員、チャールズ・ジェイムズ・フォックスが死去した。それから約1ヵ月後の10月10日に、彼の葬儀がウェストミンスター寺院で挙行されたのは、この日が、フォックスとウェストミンスター選挙区にとって特別な意味を持つゆえにほかならない。1780年のその日、彼はウェストミンスターからの初当選を果たしたのである。フォックスの葬儀とは、「民衆の味方 (The man of the people)」に人びとが最後の別れを告げると同時に、民衆の勝利を想起する重要な機会でもあったのだ²¹。しかし、1780年のフォックスの当選がそうであったように、彼の死もまた、ウェストミンスター選挙区の状況を大きく変えることとなる。

フォックスの死後、後任の議員選出のために補欠選挙がただちに実施された。全人材内閣の首班であるグレンヴィル卿は、ウェストミンスタの大土地所有者でもある第2代ノーサンバランド公の支持を確保するために、その長子であるパーシ伯を候補者に推薦した。フォックスの政治的後継者を自認するリチャード・ブリンズリ・シェリダンを検討していたものの、モイラ卿に説得されて辞退したので、10月7日にパーシが正式に選出されたのである²²。だが、有権者の意向を無視した、かつての貴族寡頭制的な状況が復活したかのような候補者の選択と選挙のあり方は、とくに急進派の幻滅と憤慨を招き、サー・フランシス・バーデットやジョン・カートライト少佐、コベットらが結集することになる。コベットが、その急先鋒であったのは言をまたない。彼は、「ウェストミンスタの有権者への書簡」を『レジスタ』誌に何度も掲載して、「選挙区売買人 (borough-mongers)」の影響力を打破し、「独立」した候補者を選ぶよう読者に強く訴えたのである²³。

20 *CWPR*, ix, 28 June 1806, col. 972.

21 E.g., *The Times*, 11 October 1806, p. 3; Kathlyn Cave, Kenneth Garlick and Angus Macintye (eds), *The diary of Joseph Farington*, 16 vols (New Haven and London: Yale University Press, 1979-84), vii, p. 2886: 15 October 1806. フォックス派の支持者たちは、10月10日とフォックスの誕生日である1月13日に記念夕食会を毎年開催することで、彼の政治的立場や方針を参加者に伝えるとともに、党派としての結束を強めようとした。Marc Baer, 'Political dinners in Whig, radical and Tory Westminster, 1780-1880', in Clyve Jones, Philip Salmon and Richard W. Davis (eds), *Partisan, politics and reform in parliament and the constituencies, 1689-1818: essays in memory of John A. Phillips* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2005), pp. 186-206.

22 Thompson, *The making*, p. 460; Spence, *The birth of romantic radicalism*, pp. 38-9.

23 *CWPR*, x, 9 August 1806, cols. 193-200: Letter I; 20 September 1806, cols. 449-54: Letter II; 27 September 1806, cols. 481-4: Letter III; 11 October 1806, cols. 545-53: Letter IV.

フォックスの葬儀から2週間後、議会在解散され、総選挙が実施された。このとき、ウェストミンスターから立候補した3名のうち、本稿でとくに注目したいのは、全人材内閣が擁立した候補者である。前職のアラン・ガードナ提督に代わり、首相グレンヴィルが推薦したのは、やはり海軍士官であるサー・サミュエル・フッドだった²⁴。彼がなぜ、候補者に選ばれたのだろうか。理由のひとつは、首相とフッドとの関係にある。彼は、1784年と1790年の総選挙でウェストミンスターから当選したフッド子爵とその弟ブリッドポート子爵ら著名な海軍提督の親戚であった。しかも後者の婚姻関係をつうじて、フッド一族は、18世紀後半以降、有力政治家を輩出したチャタム家（ピット家）やグレンヴィル家と強いつながりをもっていたのである²⁵。

もっとも、政治的なコネのみでフッドが候補者となったわけではない。過去の政府側候補者と同様に、フッドが海軍の英雄として高い名声を得ていたこともまた、重要な理由である。彼は、1798年8月のナイルの戦いにおいて、司令官ホレイシオ・ネルソン麾下の艦長としてイギリス艦隊の勝利に貢献したほか、これまでの功績からバス勲章を1804年9月に授けられていた。その後フッドは、フランス艦隊との戦闘で右腕を失う重傷を負い、海軍からの退役を考えていたものの、グレンヴィルからウェストミンスター選挙の候補者に推されることとなる。

筆者もすでに論じたことだが、18世紀末のウェストミンスター選挙は、偶然にも海軍の戦勝記念日と重なって実施されたために、海軍の勝利や英雄を記念する場を構成することとなった²⁶。1806年選挙でも、類似した状況がみられた。選挙がはじまったのは、ネルソンが戦死したトラファルガルの戦いの1周年記念日の直後であった²⁷。それゆえに、隻腕というネルソンに酷似したフッドの姿は、不世出の国民的英雄の記憶を人びとに想起させたのである。11月3日の選挙初日、彼がウィリアム・ラッセル卿や数名の海軍士官をともしないコヴェント・ガーデンの選挙会場に現れたときの模様とは、このようなものであった。「彼は正装の軍服という身なりで、その優れた功績から所持するにふさわしい勲章と名誉ある記章をすべて身につけていた。隻腕と海軍の軍服という姿は、われらがその死を深く哀惜した英雄ネルソン卿の思い出を、すぐさま会場にいたすべての人びとの心に呼び覚ましたのである」²⁸。体制による海軍の「国民的神話」の横領が、この選挙でもくりかえされたといえよう²⁹。

24 Michael Duffy, 'Sir Samuel Hood', in Peter Le Fevre and Richard Harding (eds), *British admirals of the Napoleonic wars: contemporaries of Nelson* (London: Chatham Publishing, 2005), pp. 323-45.

25 前掲拙稿、29頁。

26 1784年総選挙の期間は1782年のセインツの戦いの2周年記念日と、また1796年総選挙は1794年の「栄光の6月1日」の戦いの2周年記念日と重複していたのである。前掲拙稿、28-33頁。

27 ネルソンとトラファルガルの記念については、以下を参照のこと。Holger Hoock (ed.), *History, commemoration, and national preoccupation: Trafalgar, 1805-2005* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2007). 中村武司「ネルソンの国葬——セント・ポール大聖堂における軍人のメモレイション」、『史林』91巻1号（2008年）、176-97頁。

28 Anon., *History of the Westminster and Middlesex elections; in the month of November, 1806* (London, 1807), pp. 18-9; *The Times*, 4 November 1806, p. 3.

29 *History of the Westminster and Middlesex elections*, pp. 35-6, 78-9, 109. ホウイグのシェリダンもまた、海軍

1806年の選挙戦は、フッド優位の状況のもと、シェリダンと急進派のジェイムズ・ポールが残る議席を激しく争う展開となった。くわえて、全人材内閣とフォックス派ホイッグへの幻滅から、急進派の攻撃は、シェリダンにおおむね集中していた。それでもやはり、フッドも批判や中傷を免れえなかったのである³⁰。ここではその例として、バーデットの発言をみておこう。選挙直前の10月29日、王冠と錨 (Crown and Anchor) 亭で開催された選挙集会において、ポールの応援演説をおこなった彼は、次のような理由から、フッドの出馬に反対したのである。

国が授ける名誉や報奨の対象として、これら勇敢な士官たちのいずれもがふさわしくないと話すつもりはありませんし、そう感じていません。しかし、われわれにとってイングランドの海軍士官が不都合となりうる唯一の状況とは、彼らが議会においてあなたがたを代表するということなのです。ジェントルマン諸君、よく考えて下さい。それこそが、イングランドの海軍士官が自由に反対し、独立に反対し——わたしはこうも述べなければなりません——わが国の利害に反対する手段となってしまう唯一の考えられる状況なのです³¹。

一見、このようなバーデットの批判とは、イギリスの自由や愛国心、貿易、帝国の構想と不可分に結びついた海軍の「国民的神話」、あるいは愛国的なイメージとは正反対にあるかのようにみえる。しかしそれは、あくまで体制支持派の海軍士官に向けられたものにすぎず、海軍それ自体を対象とするものではなかったことに注意しなければならない。体制側のみならず、急進派もまた、海軍の「神話」を共有していたがゆえの批判ととらえるべきであろう³²。

ところで、フッドの立候補をめぐることは、2人のジャーナリスト、ウィリアム・コベットとヘンリー・レッドヘッド・ヨーク³³がそれぞれ対照的な見解を提示している。前者がかつてのピット支持者でいまや急進的な議会改革派だとしたら、後者はかつてのフランス革命支持者がいわば「極右」(ultra loyalist) に転向した例であることから、両者の経歴と立場もまた対照的である。まずコベットは、官職所有とホイッグゆえにシェリダンを強く批判したものの、彼の鋭い舌鋒はフッドにも向けられた。そのさい『レジスタ』誌に彼が記したのは、これみよがしな海軍のパトリオティズムへの反感であった。以下のコベットの主張は、体制による海軍の「神話」の利用への批判とみなすこともできる。

の「神話」の利用を試みた候補者であった。演説でしばしば海軍とその将兵を称賛したほか、1797年の海軍反乱の沈静化に貢献したことから、「海軍の救世主」を標榜したのである。Ibid., pp. 88, 170.

30 British Library (以下、BLと略記する), Place Papers, Add MS 27837, fos. 112, 119; *History of the Westminster and Middlesex elections*, pp. 35-6.

31 Ibid., pp. 7-8; BL, Place Papers, Add MS 27837, fo. 110.

32 前掲拙稿「ウェストミンスター選挙区」の34頁も参照されたい。

33 近年、レッドヘッド・ヨークの経歴や活動の再評価が進んでいる。たとえば、以下を参照。Amanda Goodrich, 'Radical "citizens of the world", 1790-95: the early career of Henry Redhead Yorke', *Journal of British Studies*, liii (2014), pp. 611-35.

しかしながら、わたしはシェリダン氏がウェストミンスタの議員に選出されるのには反対だが、それと同じくらい、戦隊司令官[commodore、フッドのこと]がそうなるのは気に入らない。いや、彼にたいする反感にはいっそう強いものがある。わたしにすれば、彼は内閣の手先にすぎない。そのために最初から彼に反対なのだ。それに、彼が人びとに隻腕をみせつけつつも、勲章やけばけばしい色のリボンをみせびらかそうとして、身にまとったコートを注意深くひるがえすのを見ると、わたしの反感は弱まるどころか、いっそう強まるばかりである³⁴。

レッドヘッド・ヨークも、海軍士官は議会政治家に不向きな存在であると考えていた。それでも彼が、フッドの成功を望んでいたことは、『ポリティカル・レビュー』誌から確認できる。その記事は、海軍とその英雄への人びとの反応や認識をしめす興味深い例でもあるので、少し長くなるがここで引用しておきたい。

サー・サミュエル・フッドは強い支持 (*plumper*) を受けるべきである。なぜなら、わたしが知るかぎりでは、内閣が[彼の立候補を] 通告する前から、彼はすでにウェストミンスタの有権者に立候補の意志を表明していたからである。彼はすぐれて高潔で独立した人物である。なるほど、わが祖国で最も勇敢な英雄のひとりであることを説明するにあたり、余計な言辭を弄することは無益なことかもしれない。内閣は、シェリダン氏の選挙を自分たちの権力をしめすある種の試金石にしようとしているが、善良で忠誠心の厚いすべての人びとは、勇敢な戦隊司令官を首位で当選させるべく行動すべきなのだ。最後に以下のことを記して、この話題を終えることしよう。すなわち、勅任艦長や海尉、士官候補生たちから成る陽気な一団が、われらが海軍の英雄のために選挙活動を熱意と活気、切望をもって進めているのを眺めることは、愉快でも不思議でもあるということだ。実際それは、言葉では表現できないくらい楽しいことなのである。この世に住むありとあらゆる人びとのなかで、海軍士官たちは選挙において最悪の存在であるとわたしは考えるべきだった。しかし、そうだとしても、偉大でたぐいまれな彼らの功績にたいする感謝の原則と称賛の意識は、すべての人びとの心を大きく動かすものがある。それゆえに、陰謀への無知、いいかえると彼らの見事なまでの正直さと熱烈な献身は、感嘆の的となり、あらゆる人びとの関心を集めるわけだ。彼ら一団の心温かな努力に比類なき成功がもたらされんことを！ [傍点は筆者によるもの。原文ではイタリック]³⁵

結局のところ、1806年の総選挙においても、急進派はウェストミンスタの議席を獲得することはできなかった。各候補の最終的な獲得票数は、フッドが5,478票、シェリダンが4,758票、ポールが4,481

34 *CWPR*, x, 15 November 1806, col. 760. ポールもまた、フッドのことを「グレンヴィル卿の原則の提唱者」と批判している。 *History of the Westminster and Middlesex elections*, p. 148.

35 *Mr Redhead Yorke's Weekly Political Review*, i, 4 October 1806, p. 812.

表1 1806年のウェストミンスター選挙における投票行動

	党派	獲得票数	%
サー・サミュエル・フッド			
単記投票		481	19.4
分裂投票	シェリダン	1,472	59.4
	ポール	526	21.2
	計	2,479	100.0
リチャード・プリンスリ・シェリダン			
単記投票		459	21.8
分裂投票	フッド	1,472	69.8
	ポール	178	8.4
	計	2,109	100.0
ジェイムズ・ポール			
単記投票		1,495	68.0
分裂投票	フッド	526	23.9
	シェリダン	178	8.1
	計	2,199	100.0

典拠：C. Harvey, E. M. Green and P. J. Corfield, *The Westminster historical database: voters, social structure and electoral behaviour* (Bristol: Bristol Academic Press, 1998).

票で、フッドとシェリダンが当選を果たしたのである。ポールは、「ネルソンとフォックスの友人たちの連合」の前に敗北したわけだが³⁶、第2位で当選したシェリダンとの票差は300票に満たず、ここまでの接戦は過去にそう例をみない。しかもポールの獲得票数の大半が、単記投票 (plumpers) から構成されており、数多くの有権者が彼への強い支持を表明していたことになる³⁷。『ウェストミンスター歴史データベース』によると、ポールの獲得票数のうち、単記投票が全体に占める比率は68%であった (表1)³⁸。これにたいして、選挙で事実上連合していたフッドとシェリダンの場合は、彼ら両名に票を投じた分裂投票 (splitters) が、それぞれ獲得票数の59.4%、69.8%を占めていた。データベースをさらに確認してゆくと、興味深いことがわかる。製造業か流通業に分類される有権者の多くがポールに投票する一方で、不労所得層や専門職・公的サービスのような比較的富裕な

36 *History of the Westminster and Middlesex elections*, pp. 93-4. フッドとシェリダンの凱進行進では、当選した両候補者のそばに「最も高名な愛国者フォックスと不滅の英雄ネルソン」の胸像が置かれていたという。BL, Place Papers, Add MS 27837, fo. 127.

37 ウェストミンスターのように、議員定数が2名の選挙区では、競争選挙となった場合、有権者は2票を行使することができた。2票のうち1票を政府側候補者、もう1票をホイッグもしくは急進派など、党派や立場が異なる候補者2名に投票することを、分裂投票という。しかし、有権者が2票のうち、1票だけを投じてもう1票を棄権することも可能だった。これが単記投票と呼ばれるもので、特定候補への強い支持をしめしていた。

38 データベースから得られる情報は完全とはいえないものの、こうした票構成は、当時の史料からもある程度までは確認できる。選挙直後に開催された集会で、カートライト少佐が提案した決議文によると、ポールが獲得した票のうち、全体の68.7%にあたる3,077票が単記投票であったという。*History of the Westminster and Middlesex elections*, p. 291*.

社会層に属する有権者が、フッドとシェリダンに投票する傾向にあったのである³⁹。ここから、職業や地位、財産におうじた有権者の政治的二極化が、ウェストミンスターで生じていたと推定することもできよう。このような選挙結果と有権者の動向から、惜敗に終わったとはいえ、近い将来の選挙では、急進派が当選するという期待感が高まったのである。

2. 1807年——急進派の勝利

2.1. コクリンの立候補と「独立」の主張

1807年4月、国王ジョージ3世は全人材内閣を更迭し、ポートルランド公に組閣を命じた。その直後、会期が半年も経ていないにもかかわらず議会在解散され、「民意(the sense of his People)」に問うべく、総選挙が実施されたのである。ハノーヴァ朝のイギリスにおいて、クリティカルな問題であり続けたカトリック解放問題が重要な争点として前景化したため、この選挙は「反教皇派 (No Popery)」選挙、あるいは「国王と教会」選挙とも呼ばれる⁴⁰。総選挙全体についていうと、ホークスベリーやカーズレイ、カニングら旧ピット派が再結集したポートルランド政権の勝利という結果に終わった⁴¹。しかし、当然ながら例外は存在する。ウェストミンスター選挙こそが、まさしくそうであった。

1807年のウェストミンスター選挙は、5名の候補者により議席が争われた。前年の総選挙では首位で当選したサー・サミュエル・フッドは、軍務により本国不在であったうえに、状況が不利であると考え出馬を辞退したため⁴²、前職の議員で再出馬したのはシェリダンだけだった。政府支持を表明した候補者は、ジョン・エリオットというピムリコのビール醸造業者で、ウェストミンスター義勇騎馬隊の大佐の地位にあった人物である。1780年以来初めて、政府は、海軍士官を候補者として擁立しなかったわけだ。以上にたいして、急進派に分類される候補者は、先の選挙で善戦したジェイムズ・ポール、それからバーデットとコクリンの3名である。しかしポールは、選挙をめぐる意見の相違からバーデットと決闘し、重傷を負って早々に出馬を取り止めていた。バーデットはといえれば、過去のミドルセクス選挙における巨額の出費から、彼はこの選挙への関与を拒否したが、選出されれば議席を受け入れると宣言していた。したがってコクリンは、1807年選挙において選挙会場

39 前掲拙稿、28頁。

40 全人材内閣が、陸軍の高級指揮官層へのカトリックの任命を認める法案を提案したことが、国王との対立を深め、世論の反発を招いたのである。Spence, *The birth of romantic radicalism*, pp. 37-8; Boyd Hilton, *A mad, bad, & dangerous people? England, 1783-1846* (Oxford and New York: Oxford University Press, 2006), pp. 107-9.

41 1806年と1807年の選挙を契機にして、トーリの名称が、国王とイングランド国教会を尊重する、国制と宗教における現状維持派という新たな意味を獲得したとされる。Frank O'Gorman, *The emergence of the British two-party system, 1760-1832* (London: Edward Arnold, 1982), p. 56; Michael J. Turner, *The age of unease: government and reform in Britain, 1782-1832* (Phoenix Mill: Sutton Publishing, 2000), pp. 106-37; Hilton, *A mad, bad, & dangerous people?*, pp. 195-209.

42 その後フッドは、彼の友人で前海軍委員 (Lord of the Admiralty) であったサー・エヴァン・ネピアンの助力により、ブリッドポート選挙区から選出された。History of Parliament Online.

に姿を現した、ただひとりの急進派の候補者であった。

なぜコクリンは、ウェストミンスターから立候補したのだろうか。史料からは確認できないものの、コベットが彼に出馬を薦めたと考えたほうが、ホニントン選挙以降の両者の関係からして自然であろう。もっともコクリン自身も、ウェストミンスター選挙区がもつ重要性を意識していたと考えられる。彼の自伝にはこうある。「海軍やその他の腐敗にたいしてわたし個人の抗議を表明するにあたり、重要な選挙区という重みをくわえるために、ウェストミンスターからの立候補を決意したのである」⁴³。「選挙の独立 (electoral independence)」⁴⁴を誇るイギリス最大の都市選挙区からの当選は、広範な国民からの支持を意味し、議員の主張や立場に強い説得力を与えることとなる。のちに大法官となるホウィグの政治家ヘンリ・ブルームは、この選挙区のことを「人びとの宿願の頂点」であり、「人に無限の善をなすことを可能にする」と評したほどである⁴⁵。

立候補の動機との関連で考えておきたいのは、コクリンが選挙で再三強調した「独立」という政治的主張と立場である。たとえば彼は、選挙直前の5月1日にペル・メルのセント・オールバン亭で開催された集会において、会に出席した支持者や有権者に次のように演説している。

腐敗選挙区を代表する人間は、ウェストミンスターのような都市を代表している人間と等しく重要な存在だと自認することはできません。ウェストミンスターにおいてこそ、あらゆる党派・派閥との関係を断ち切ることができるのです。わたしの望みとは独立するだけでなく、党派から独立しうる場にすすんで身を置くことです。……そこでわたしは、ウェストミンスターの有権者の票を請う自由を行使したのです⁴⁶。

近年、マシュー・マコーマックが論じたように、「独立」は、ハノーヴァ朝時代のイギリスにおいて、国民や男性の資質、ひいては政治家・公人の資質として重視されていた。とりわけ、政府やエリートの腐敗を攻撃し、改革を要求する急進派にとって、独立はその主張・行動の根幹をなすもので、ことさらに強調しなければならなかったのである⁴⁷。コクリンもまた、その例外ではなかった。

5月7日から開始された選挙戦でも、コクリンは、コヴェント・ガーデンの選挙会場に集った人びとに独立の立場を伝えようとした。選挙初日の模様については、『ネイヴァル・クロニクル』誌の

43 Cochrane, *Autobiography*, i, p. 215.

44 選挙の独立については、以下を参照。O'Gorman, *Voters, patrons, and parties*, pp. 259-84; Matthew McCormack, 'Metropolitan 'radicalism' and electoral independence, 1760-1820', in Cragoe and Taylor, *London Politics*, pp. 18-37.

45 Thornton Leigh Hunt (ed.), *The correspondence of Leigh Hunt: edited by his eldest son*, 2 vols (London, 1862), i, p.63; Henry Brougham to Leigh Hunt, (September) 1812.

46 Cochrane, *Autobiography*, i, pp. 215-6; *Caledonian Mercury*, 7 May 1807, pp. 2-3.

47 Matthew McCormack, *The independent man: citizenship and gender politics in Georgian England* (Manchester: Manchester University Press, 2005), esp. chapters 6 and 7. Cf. idem (ed.), *Public men: masculinity and politics in modern Britain* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2007).

記事がとくに興味深い。同誌は、海軍や海事にかんする情報と知識の普及のために、ジョン・マッカーサとジェイムズ・ステイニア・クラークの両名により1798年に創刊され、以後1818年まで年2回刊行された雑誌である⁴⁸。そこには、このように書かれていた。

コクリン卿は、1807年の総選挙ではウェストミンスター市の代表として立候補した。引き続き、候補指名日には予備的な手続きが進められたのだが、閣下は演説台から飛びおりて、治安官と民衆を分かち細長い木の柵のうえに立って、長時間にわたり熱心に演説したのである。民衆が彼の話に耳を傾けているときに、好意をしめず様子が見受けられないなら、彼らはすぐに自分を拒絶するだろうとコクリン卿は考えていた。彼は完璧に独立した立場にあり、いかなる人物と結びついていなかった⁴⁹。

こうした船乗りらしい振る舞いのみならず、コクリンの演説も、人びとに彼の独立した立場を明確にしめすものであった。彼は党派や派閥、閣僚、他の候補者とはまったく無縁の「完全な独立」ゆえに出馬したと宣言し、人びとの喝采を浴びたのである⁵⁰。彼はまた、「熱烈なる改革の友人」(the zealous friend of reform) であるとして、次のように発言している。「当選したあかつきには、国制がもつ本来の純粹さを取り戻すべく尽力し、腐敗の調査と国民の利害にかなうあらゆる提案を支持することを誓います」⁵¹。コクリンは独立だけでなく、国制をめぐる言語も用いたのである。

以上のようなコクリンの発言を最も好意的に評価したのは、むろんコベットであった。彼は仕事仲間であるジョン・ライトにあてた手紙のなかで、こう記している。「コクリン卿の演説は称賛に値します。彼のような立場の人間にとって、こうした主張は目新しいものですし、当選したのちも、彼はその言葉を守るでしょう」⁵²。コベットは、『ポリティカル・レジスタ』誌においても、「[バーデットを除く] 3名の候補者のなかで、コクリン卿こそが、あなたがたにとって決定的に望ましい」と読者に訴えたのである⁵³。コクリンの選挙は、コベットという急進的なジャーナリズムによって大きく後押しされていたといえよう。ラディカリズムの展開に多大な影響をおよぼした『レジスタ』誌は、その後もコクリンを擁護する一種のプロパガンダとなった。ちなみにコベットが、労働者層

48 マッカーサとクラークの両名はともに艦隊勤務の経験をもつほか、のちに次のネルソンの伝記を著したことでも知られる。James Stanier Clarke and John M'Arthur, *The life of Horatio, Viscount Nelson, through his lordship's papers*, 2 vols (London, 1809).

49 *Naval Chronicle*, xxii (1809), pp. 1-21, esp. pp. 19-20.

50 Cochrane, *Autobiography*, i, pp. 216-7; [J. C. Jennings,] *The proceedings of the late Westminster election* (London, 1808), pp. 3, 23-4, 55, 65, et passim; *The Times*, 8 May 1807, pp. 3-4; BL, Place Papers, Add MS 27838, passim.

51 *Ibid.*, fos. 129-30; [Jennings,] *The proceedings*, pp. 32-3, 91.

52 BL, Original Correspondence of William Cobbett, Add MS 22906, fo. 280: 9 May 1807, William Cobbett to John Wright.

53 *CWPR*, xi, 23 May 1807, cols. 925-9.

表2 1807年のウェストミンスター選挙における投票行動

	党派	獲得票数	%
サー・フランシス・バーデット			
単記投票		1,672	32.6
分裂投票	急進派	1,423	27.7
コクリン	ホウイグ	1,527	29.7
シェリダン	政府	286	5.6
エリオット	急進派	226	4.4
ポール			
計		5,134	100.0
トマス・コクリン卿			
単記投票		632	17.0
分裂投票	急進派	1,423	38.4
バーデット	ホウイグ	374	10.1
シェリダン	政府	1,264	34.1
エリオット	急進派	15	0.4
ポール			
計		3,708	100.0

典拠： *An exposition of the circumstances which gave rise to the election of Sir Francis Burdett, Bt, for the city of Westminster* (London, 1807), p.18.

まで読者を拡大するために、同誌を1816年秋に大幅に値下げしたのは、コクリンの助言によるものとされている⁵⁴。

1807年5月23日の午後3時すぎ、ウェストミンスター選挙の投票が締め切られ、バーデットとコクリンの当選が宣言された。選挙が終わったのちは、共同体の行事として当選議員の凱旋行進がおこなわれるのが慣習であったが⁵⁵、バーデットは、先述したように、ポールとの決闘で負った傷がまだ癒えておらず、選挙会場に姿を現していなかったため、コクリンだけが凱旋したのだった。この模様について、『モーニング・ポスト』紙は以下のように記している。

午後4時ごろ、コクリン卿は、青色のリボンや旗、月桂冠で装飾された無蓋のランドー馬車に乗って、コヴェント・ガーデン周辺を凱旋した。騎乗のジェントルマンが2人ずつならんで行進を先導し、そのうしろには、正装の士官候補生と海尉たちが率いる、水兵を満載した船〔の形をした山車〕が続いた。次に、コクリン卿と選挙に関係した海軍士官たちが進んだのち、閣下の友人が乗ったジェントルマンの馬車が数多くみられたのである。行進全体はさわめて優雅で、とても愉快的なものだった。閣下は、行進を一目みようとして集まった紳士淑女の集団に熱烈に歓迎

54 管見のかぎりでは、これにふれた史料はみあたらないものの、コベットの伝記作家たちは、『ポリティカル・レジスタ』誌の値下げにあたりコクリンの助言があったと記してきた。E.g., anon., *The life of William Cobbett, Esq. late M. P. for Oldham: including all the memorable events of his extraordinary life ... with an impartial critique on his public character ... embellished with portraits* (London, 1835), p. 111.

55 選挙の儀礼がもつ意味については、Frank O'Gorman, 'Campaign rituals and ceremonies: the social meaning of elections in England, 1780-1860', *Past and Present*, cxxxv (1992), pp. 79-115をみよ。

されていた。民衆はかなり乱暴で、リチャードスズ・ホテルの窓を何枚も割っていた。行進は、コヴェント・ガーデン周辺をまわったのち、サウサンプトン通りを進み、ストランド街を経て西に向かっていった⁵⁶。

ここで前章と同じように、有権者の投票行動を分析して、急進派の海軍士官の当選の意味を考えたいが、1807年選挙の場合には大きな問題がある。そもそも、投票者名簿 (poll book) のような史料が残存していないため、『ウェストミンスター歴史データベース』を利用した統計的な分析が不可能なのである。それでも、コベットの『ポリティカル・レジスタ』誌などに掲載された投票結果から、各候補の獲得票数とその構成は知ることができる。

表2を一瞥して気づくのは、同じ急進派の候補とはいえ、バーデットとコクリンでは、票の構成がずいぶん異なることである。まず、第1位で当選したバーデットへの票の内訳をみると、彼だけに票を投じた単記投票が全体の32.6%を占めており、続いてコクリン、シェリダンの分裂投票が占める比率がそれぞれ27.7%、29.7%であったことが確認される。しかし、第2位で当選したコクリンの場合、単記投票は全体の17.0%とそれほど多くはなく、バーデットとの分裂投票が38.4%、政府支持者であるエリオットとの分裂投票が34.1%を占めていたのである。このように、政府と急進派の候補の双方に多くの有権者が投票するというのは、過去のウェストミンスター選挙では例をみない⁵⁷。「雄弁家」ヘンリ・ハントも、後年こう回想している。「選挙のあいだ、コクリン卿が内閣の支持者から大きな支援を受けていたのはあきらかだった」⁵⁸。

なぜ、コクリンの主張や立場にもかわらず、こうした有権者の投票行動がみられたのか。その理由のひとつは、彼の反カトリック感情に求められよう。1807年選挙の重要な争点が、カトリック解放問題であったことは先述した。コクリンは、選挙戦でこの問題に直接ふれることは避けていたけれども、選挙広告には、「その目的において不適切であるばかりか、海軍内部に宗教的な不和をもたらす」と記していたのである⁵⁹。また、コベットとは立場がまったく異なる「極右」のヘンリ・レッドヘッド・ヨークも、コクリンを支持していたが、それは、彼がコクリンを急進派ではなく、国王とイングランド国教会を護持する体制支持派とみなしたためである。『ポリティカル・レビュー』誌には、こう書かれている。

コクリン卿を支持するよう呼びかけるために、あなたがたをほんのわずかな時間でさえ引き留めるつもりはない。なぜなら、その才能と職業への忠実さから、彼は候補者として自薦するに

56 *Morning Post*, 25 May 1807, p. 3. Cf. Rudolph Ackermann, *Microcosm of London*, 3 vols (London, 1808), i, pp. 208-9

57 1790年以降、政府側候補者である海軍士官の獲得票数のうち、急進派との分裂投票が占める比率は20%を超えることはまずなかったのである。前掲拙稿、27頁。

58 Henry Hunt, *Memoirs of Henry Hunt Esq., written by himself, in his Majesty's jail at Ilchester, in the county of Somerset*, 3 vols (London, 1820-2), ii, p. 272.

59 [Jennings,] *The proceedings*, pp. 2-3; BL, Place Papers, Add MS 27838, fo. 100.

十分にふさわしい人物であることについて、わたしがこれ以上述べることはないからである。とはいっても、これは述べておく必要があるかもしれない。最近、君主ばかりか、国家と教会がひどく脅かされたが、そのさい彼は、それらを守るべく議会で票を行使したのである。現在の投票状況からすれば、彼は当選者のひとりとなることが推測されよう⁶⁰。

もうひとつの理由は、過去のウェストミンスター選挙の経緯もあって、海軍の勅任艦長というコクリンの地位が、政府との関係を連想させたことである。とくに首都の急進派は、彼を偽りの独立の旗を掲げる「宮廷の候補者 (Court Candidate)」とみなして、「エリオット大佐とコクリン卿はともに政府の支持を得ている」と非難している⁶¹。そればかりか、1806年のホニトン選挙における買収行為が批判されたときに、コクリンの反論が不十分だったことも、そうした疑念を強めた⁶²。もっとも、コクリンに投票した政府支持の有権者の存在が、結果として急進派の勝利を促したと考えても、あながち誤りではあるまい。

2.2. 革命化したジャック・タール

これまで本章は、1807年選挙にかんして、コクリンの発言や立場、有権者の投票行動に注目して考察してきた。最後に、海軍の「神話」や愛国的なイメージとの関係から、急進派の海軍士官の出馬と当選の意味を考えることとしよう。

過去のウェストミンスター選挙において、政府側候補者であるフッドやガードナラ提督たちは、議会政治には不向きな存在であり、軍務のために議員の義務を放棄すると対立候補からしばしば批判されてきた。「はたして同時に、ひとりの人間が海峡で敵艦隊と戦い、セント・ステイーヴン礼拝堂で法を定めることができるのか」というわけだ⁶³。また、ウェストミンスターから出馬した海軍士官の候補者が、自由や独立、国民の利害を脅かす存在として非難されたことも、前章で確認した。

しかし、彼らに投げかけられたより深刻な批判とは、国民や男性としての資質を問うものであった。しかもそれは、対立候補や反対者よりはむしろ、海軍の支持者や利害関係者からもっばら主張されたのである。一例をあげると、1806年選挙で「海軍の救世主」とみずから標榜し、海軍への称賛を惜しまなかったシェリダンは、フッド子爵をかつて非難したことがあった。彼は、イギリス水兵の率直さや男らしさを賞賛しつつも、政治にかかわるフッドを船乗りのあり方からかけ離れた「策

60 *Mr Redhead Yorke's Weekly Political Review*, ii, 16 May 1807, p. 391; 30 May 1807, p. 433. Cf. [Jennings,] *The proceedings*, p. 176.

61 BL, Place Papers, Add MS 27838, fos. 159-60.

62 *Morning Chronicle*, 16 May 1807, p. 2; BL, Place Papers, Add MS 27838, fo. 147, et passim. 諷刺版画家トマス・ローランドソンは、「コヴェント・ガーデンの選挙会場に出現した腐敗選挙区の亡霊」を出版し、ホニトン選挙区という「亡霊」に悩まされるコクリンを描いた。British Museum, the Department of Prints and Drawings (以下、BMと略記する), no. 1948, 0214. 708: *The ghost of a rotten borough, appearing on the hustings of Covent Garden*.

63 *Morning Post*, 27 May 1796, p. 3.

士のような両棲類の提督」と呼んだのである⁶⁴。1807年選挙のときにも、こうした主張はくりかえされた。『ネイヴァル・クロニクル』誌の記事がその例である。その内容とは、イギリス水兵のあるべき姿をふまえて、船乗りである海軍士官の政界入りを憂慮するものだった。

飾り気のない正直なイギリスの船乗りたちの性格が、どこまで政治家たちの策略や狡猾さと調和するのかを、われわれは判断するつもりはない。多くの勇敢な士官たちの高貴な性格が、政治家になることでしばしばさいなまれてきた。海軍省とその従者たちは、政治党派や陰謀からできるかぎり離れるべきだというのが、いつも最良にして最も有能な船乗りたちの切なる願い（どれほど無意味であっても、それはしめされてよかった）であった⁶⁵。

シェリダンや『ネイヴァル・クロニクル』誌が前提としていたのは、社会的現実とは切り離されたジャック・タール（Jack Tar）の理想像である。アメリカ独立戦争のころから、ジョン・ディブデンによる歌、版画や劇などをつうじて、陸上では粗野で自堕落だが、海上では誠実で男らしく、祖国のために勇敢に戦うという愛国的なイギリス水兵への認識が広まりつつあった⁶⁶。政界入りした海軍士官は、そうした水兵の理想像における最も重要な要素、国民や男性の資質を喪失したとして批判されたのである。

それでは、急進派であったコクリンの場合はどうだろうか。水兵をめぐる言説や表象においてこそ、じつは1806年以前の体制支持派の提督との大きな違いをみることができる。なるほど、コクリンもまた、当選後、軍務のために議員の責務を果たしていないとしばしば批判されたものの、国民や男性としての資質が疑問視されることはなかったようである。むしろ彼は、イギリス水兵の理想像と重ねて評価されたとおもわれる。これにかんして、1枚の諷刺版画から考えることとしたい。

ジェイムズ・ギルレイは、「選挙の候補者たち、あるいはポールの頂点にたつ共和派のガチョウ」を出版し、1807年のウェストミンスター選挙を諷刺した（図1）⁶⁷。これは、コヴェント・ガーデンの選挙会場に立てられた棒（pole）を登ろうとする各候補を獲得票数（poll）の順に描いたものだが、「共和派のガチョウ」ことバーデット、道化姿のシェリダンといった候補者とくらべると、コクリンは「コベットより貸し与えられた海軍改革の棍棒」をふりかざすヘラクレスとして、まだ好意的に描かれている。またコクリンが、ビール樽姿のエリオットを踏み台にしているのは、彼が得た票の少なくない部分が、エリオットとの分裂投票であったことを暗示しているのかもしれない。とも

64 *The Senator; or, Clarendon's parliamentary chronicle: containing an impartial register; recording, with the utmost accuracy, the proceedings and debates of the Houses of Lords and Commons*, x, p. 1492: Commons, 20 June 1794.

65 *Naval Chronicle*, xvii (1807), p. 421.

66 Isaac Land, *War, nationalism, and the British sailor, 1750-1850* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2009), esp. pp. 88-97.

67 BM 10732: *Election - Candidate; - or - the Republican - Goose at the Top of the Pol(l)e* (1807).

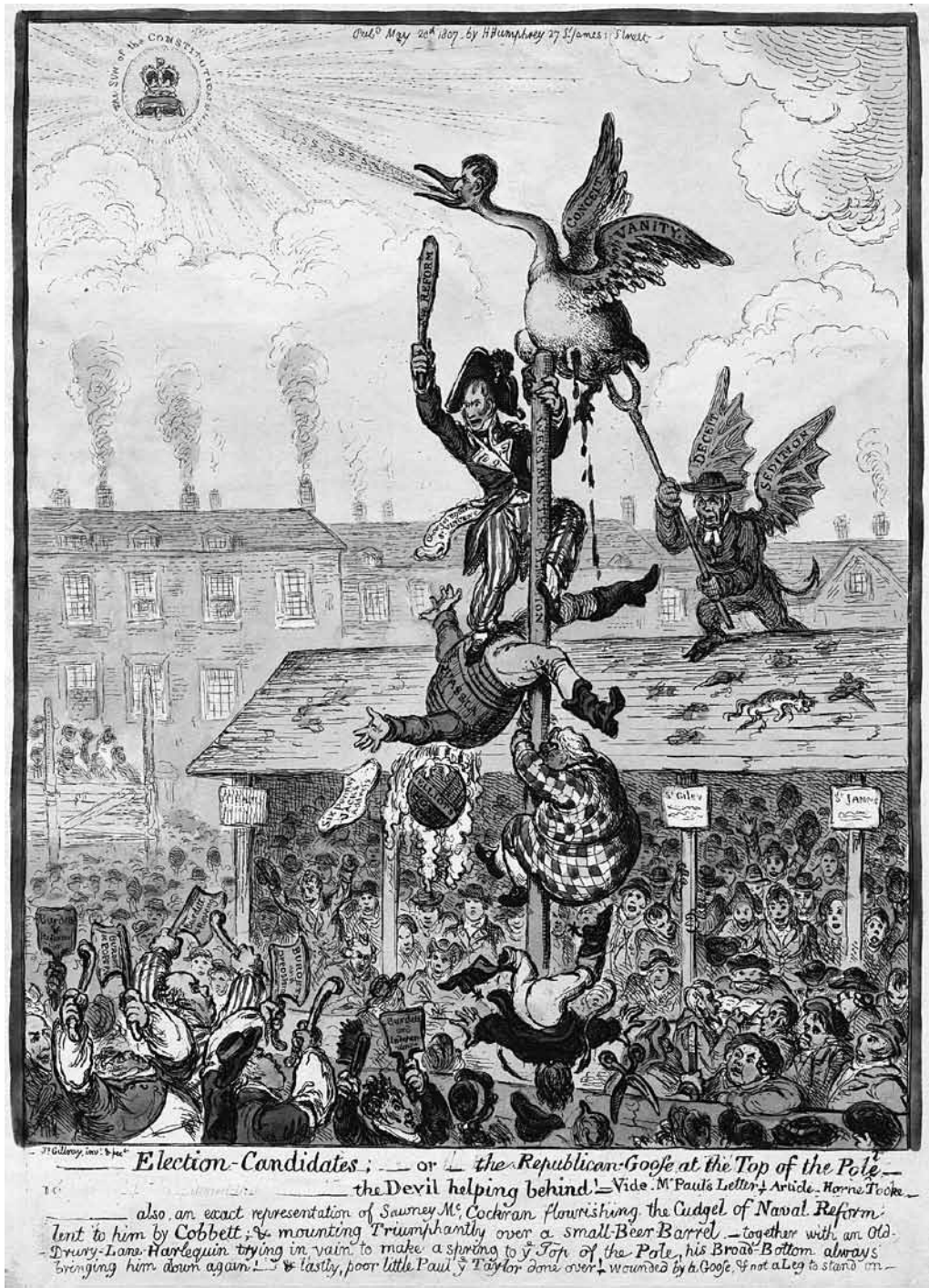


図1 ジェイムズ・ギルレイ「選挙の候補者たち、あるいはポールの頂点に立つ共和派のガチョウ」
 (1807年、英国博物館蔵) © The Trustees of the British Museum

あれ、この版画で目を引くのは、海軍士官の制服を身にまとい、縞模様の水兵のズボンをはいた彼の姿である。ここでは、コクリンのズボンはアメリカ国旗の「抵抗のストライプ」をおもわせる赤と白の縞模様となっているが、その後出版された版画では、フランス国旗を連想させる3色のストライプで描かれることもあった⁶⁸。

前任の海軍出身の議員とは対照的に、コクリンは、独立の主張と改革への熱意から、イギリス水兵としての評価を維持しえたのではないだろうか。『ネイヴァル・クロニクル』誌が、コクリンの当選について読者にとくに注意を促し、海軍の利害代表者として期待をはせたのもそのためであろう。だがコクリンは、コベットやバーデットとの関係から、「革命派」や「ジャコバン」と中傷されるのを避けることはできなかった。彼は、海軍の腐敗や改革をめぐる発言や行動から、海軍内部に不和を生じさせるだけでなく、海軍への国民の信頼を揺るがすデマゴーグとして、反対者から非難されたのである⁶⁹。諷刺版画における海軍士官とジャック・タールの混合した姿とは、国民や男性としてのコクリンの資質だけでなく、急進派としての立場をみる人びとに想起させるものであったといえよう。

むすびにかえて

ウェストミンスター選挙区の歴史において、議会改革派が大きく躍進した1806年と1807年の選挙は、重要な画期とみなされてきた。筆者もそれに異論があるわけではない。しかし従来の研究は、しばしば目的論的・進歩史観的な想定のもとで、急進的なウェストミンスターの成立と展開を論じてきたのではないだろうか。そのことが、ウェストミンスター選挙区の重要な側面のひとつを、歴史家にして看過させたとも考えられる。海軍の英雄の存在は、ウェストミンスターの政治文化の不可欠な構成要素をなしていた。急進派が当選を果たした1807年選挙でも、それを確認することができる。これまでの議論から、冒頭でかかげた目的はおおむね果たせただろうが、最後に残された課題を述べて、本稿のむすびにかえることとしたい。

最初にあげる課題とは、19世紀初頭のイギリスのラディカリズムにかかわる。たとえば、コクリン自身の主張にかかわらず、彼を体制支持派とみなす人びとが少なからず存在したことは確認したが、ラディカリズムの展開におけるナポレオン戦争時代の固有の意味を考えるうえでも、これは示

68 E.g., BM 10736: *The Close of the Poll or John Bull in High Good Humour* (1807); BM 12212: *Representation of y^e Gull Trap - & y^e Principal Actors in y^e New Farce Call'd y^e Hoax! Lately Perform'd with Great Eclat on y^e Stock Exchange* (1814).

69 海軍委員であったジョン・マーカム提督は、アディントン政権の海軍大臣で、ときの海峡艦隊司令長官であるセント・ヴィンセント伯をコクリンが非難したため、トマス・グレンヴィルにあてた書簡のなかで、彼のことを厳しくこう批判している。「彼の愚かで不埒なおこないは、嫉妬、嫌悪、悪意、ありとあらゆる無慈悲さによるものなのです」。BL, Thomas Grenville Papers, Add MS 41857, fo. 31: Admiral Markham to Thomas Grenville, 27 May 1807. Cf. *Morning Post*, 16 May 1807, p. 3.

峻的である。ピーター・スペンスやフィリップ・ハーリングらの研究によると、当時の急進派は、戦争の遂行と議会・行財政改革の主張を結びつける一方で、イギリスの自由や国制を擁護する愛国者としての立場を明確にすることで、人びとの支持を獲得したという⁷⁰。コベットやバーデットだけでなく、コクリンもまた、「復古的」、「ロマン的」と形容される当時のラディカリズムを考察するうえで格好の対象となりうるはずだが、議論が尽くされているとはいえない。この研究上の空白は、ぜひとも埋めなければならないだろう。

もうひとつの課題は、海軍の意味や機能にかかわるものである。18世紀末以降、海軍のパトリオティズム、あるいは「国民的神話」は野党側から体制側に大きくシフトしていたとされる。すでに筆者も論じたように、そのことは、ウェストミンスター選挙区における海軍士官候補の擁立と当選の事例にも顕著にみられる。では、コクリンの事例はどう考えるべきなのか。体制側ではなく、急進派に有利なように海軍の「神話」が作用していたと理解してもよいのだろうか⁷¹。もしそうだとすると、その歴史的脈絡とはいかなるものなのか。このような問題についても、今後考察を深めることをめざしたい。

[付記] 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究(B)、課題番号：21720271）による研究成果の一部である。

70 Harling, *The waning of 'old corruption'*; Spence, *The birth of romantic radicalism*.

71 Jenks, *Naval engagements*, chapter 5. ジェンクスもまた、急進的なウェストミンスターにおけるコクリンの事例を検討している。しかし、海軍のパトリオティズムや象徴をめぐる修辞上の抗争を問うという彼のアプローチでは、ラディカリズムそれ自体を批判的に検討しえないという難点がある。